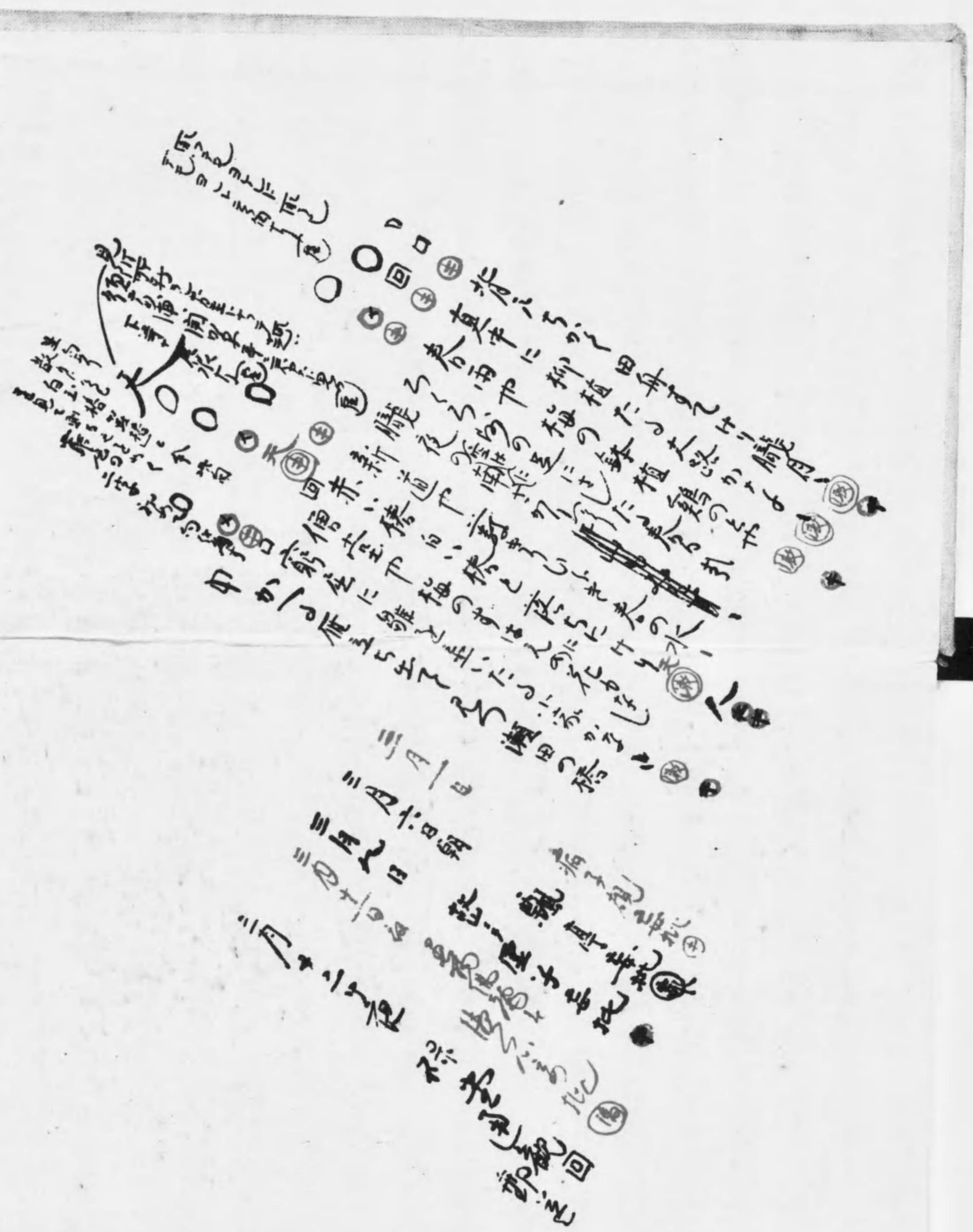
碧梧洞句集

911.368
12
⑦
911.368-Ka92-2ウ
1200500756311

碧梧洞

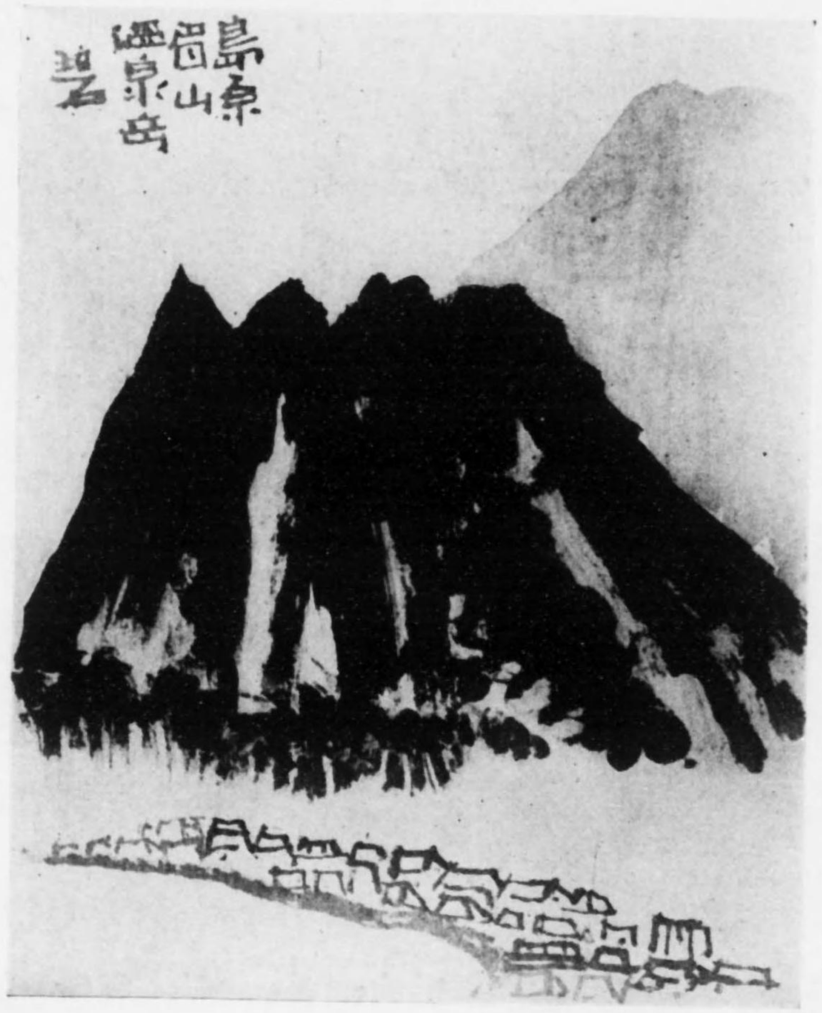
始

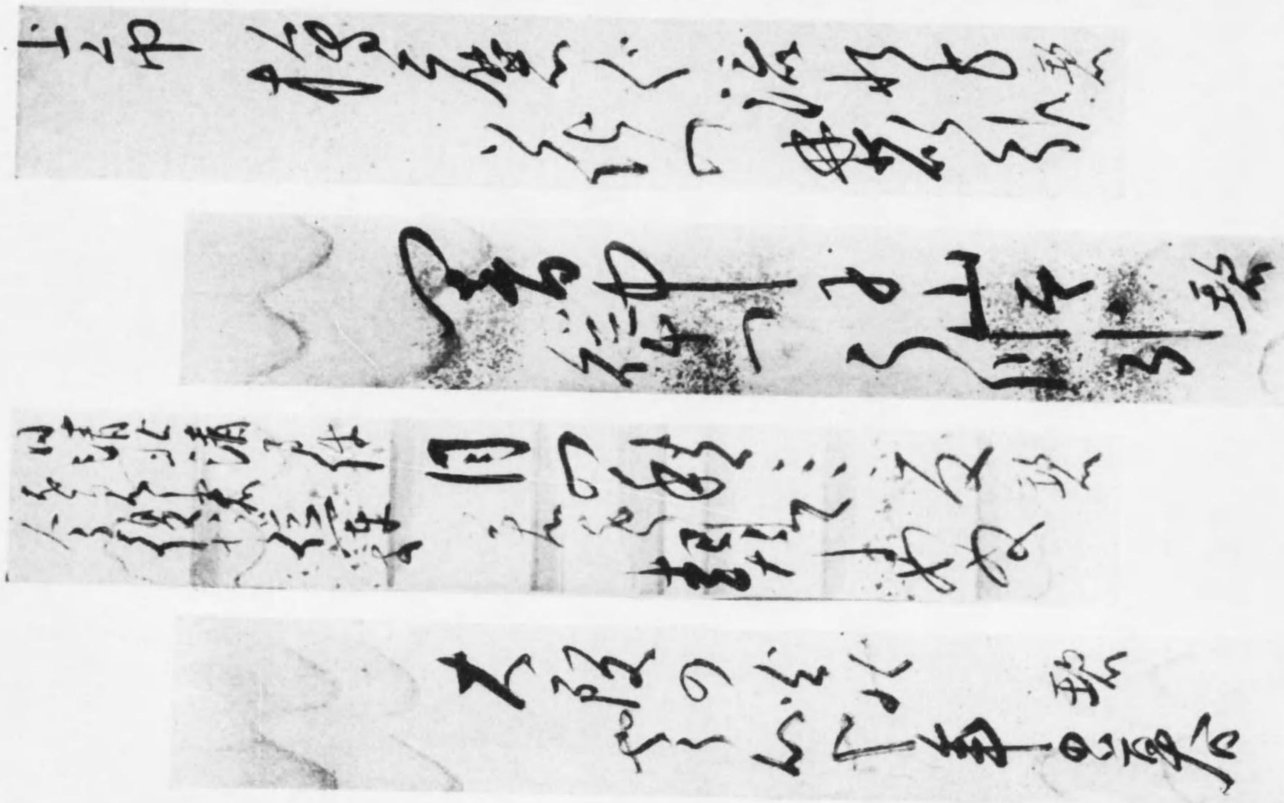


911.368
KA92
2
ウ

白雨十梧句集

昭和十五年
大久保友
帝國圖書


島泉
岡山
泉岳
碧石



903
93

序

佐藤紅綠

碧梧桐句集を梓に上するに當り、編者小蛤君何の思ふ所ありてか余に序を徵す、余曰く、現時俳壇多士濟々たり、碧子の門下亦俊髦に乏しからず、遺稿に序する別に其人あらん、余の如きは故人と莫逆の交ありと雖も、僻陬の一老骨、恐らくは蛇足を添へて龍を誤またんことをと、小蛤君聽かず、卷を机上に留めて去る、會々亡師鵜南先生の忌日に中り、東上して其墓を展するに及び、併せて君が墓を訪ぬ、斜陽蟬聲を送り、暮色看々迫る、余閼迦を君が墓に濺ぎ君に謂て曰く、生前の辱知紅綠來て君が墓前にあり、請ふ與に往時を語らん、子規先生の三十三回忌を修するや、余束上して鼠骨君と共に肋骨將軍を訪ふ、君亦た來り會す、四人相顧みて鬢髮を憫れむ、乃ち曰く、師逝きて三十三年夢幻に過ぐ、次に

修すべきは五十回忌とす、而して實に十七年後にあり、余等亦た遠く黄泉に歸せん、誰か餘命を保ちて亡師の忌を修するものぞ、三人の眼期せずして君に萃まる、曰く幸ひに碧君あり壯健鐵の如し、以て後事を托せんと、君莞爾として曰く諸我肯て任に當らんと、當時豈君が余等に先だたんを想はんや、自他以て危ぶみしものは安く、安しとせるもの先だちて逝く、鴻雁の列其序定かならざるは蓋し天の命數なり。

師逝きて同門四散し、君が新傾向の旗幟を樹てゝ俳壇を席捲せる時、余既に俳事に遠ざかりて遠く浪花にあり、相見て肝膽を吐くの機なし、只だ其俳風を望見して、奇才の縱横に驚くのみ、後ち君が歐洲浸遊を終へて歸朝せる時、余亦た東京に居を移して萍水相逢ふを得たり、一夕舊知相會して君がために伊香保樓に小宴を開く、席上紙を展べ毫を揮ふこと淋漓たり、余君が面を犯して曰く、故師在世の時、君の書を評して天資の能と稱せり、今君の書を見るに六朝の風姿を學ぶに似たり、是れ珠玉を棄てゝ瓦石を拾ふにあらざるか何爲ぞ奔放自由なる君の本質に還らざると、君吁咈して曰く、愚なるかな子の言や、生あれば動あり、朝に書ける文字は朝の文字なり、夕べに書ける文字は夕べの文字なり、文字

の形象は相同じからんも、氣魄は日に幾度か變ず、文字は氣なり、氣發して文字となる、猶ほ一瞬の氣即外に觸れて俳句となるが如し、豈昨を以て今を律すべけんや、若し朝と夕と昨と今と同一の文字を好しとせば、筆を拋つて鉛槧に就くに若かずと、余其の卓見に服して復た言はず。

子規先生古今の俳句を捃摭して大道を明かにし、蕪を闢き棘を芟りて天下に歸趨を知らしむ、同門彬々として人材輩出し、此に欝々乎たる皇國文學の鴻圖成る、當時拔群の偉才を以てして俳句に專念し、師道を扶翼して其大を成さしめたるもの、先づ指を君と虚子君に屈せざるべからず、先生簀を易ふるに及び、日露戰爭起り、戰熄むと共に歐洲の思想文物洪水の如く闖入し來り、文壇は舊套を脱し俳壇亦た動搖せり、而して此に君と虚子君の對峙を見る。

虚子君は、俳句には俳句の領域あり、十七字小なりと雖も以て吐噓に足るとなし、其の生命を形態に求めずして内容に求む、而して君は新らしき酒は新らしき革囊に盛るべしとなし、先づ形式の臼窠を脱して十七字を破壞し以て縱横馳突せんとす、一は内に求め一は

外に求む、是に於て兩者の見地柄鑿相容れず、遂に旗鼓堂々相見ゆるに至る、世人之れを見て豆を煮て豆の萁を燃するの類となすあれども、是れ職々の言、兩者の交情依然として蜜の如し、戰ふは道に忠なればなり、親むは情に篤ければなり、爭うて此に君子なるを見る。

兩者の唱ふる所、何れか是何れか非なるに至ては、未だ容易に斷ずべからず、論は百年の後に決せん　其の主義の相異るは斯道に忠なるの致す所、蓋し止むを得ざるなり。

在昔蘇東坡、韓文公の碑に刻して曰く、汗流れて藉漫走つて且つ僵ると、君が新を探り眞を究むるや峻嚴にして一刻の遲疑なく、邁進して毫末の危惧なし、是故に後昆汗流れて君に追隨する能はず、是れ君が孤獨にして群を喪ひし所以なりとす、余曾て君に戲れて曰く、君は猿田彦に似たり、率先大義に徇うて天の八衢に天孫を奉迎し、農耕牧畜を庶民に教へ、醫藥の術を蒼生に傳へ、後ち海産を研究して國に利せんとし、帆立貝に手を嚙まれて病を獲て起たず、新らしき道を開拓して道に殉ぜる、夫れ君の運命かと、君瓏然として曰く、我れ豈帆立貝に嚙まれんやと、相顧みて哄笑す。

帆立貝か否かは余も亦知らず、余は只だ君が偉器を擁して偃蹇世に容れられず、三十年己が手に開拓せし俳壇を去れるを惜むのみ、水急なれば落花止まらず、古來の哲人英雄多く世と乖くもの、蓋し免れざる命の存するにあるか。

抑々明治の俳壇は君に負ふ所極めて多し、其吐嘱する所の俳句、生新にして高邁、天馬空を行くの概あり、此故に先師常に君を推奬して鬼才ありと稱す、君を知らずんば明治の俳壇を知る能はざるなり、大正に至て君の新旗幟を見る、所謂新傾向なるものは毀譽ありて余亦た君と見を異にすと雖も、而も人の苦しまざる處に苦み、人の勞せざる處に勞し、鋭意只だ斯道の開發に邁進せる、斯道に篤きにあらずんば安んぞ君の如きあらん、勞は萬人に過ぐれども報ゐらるゝ所薄く、功は竹帛に垂るべくして世人其恩を忘れんとす、余之を某氏に聽く、君が生前句集刊行の擧ある既に久し、而も書肆は其賣れざるを虞れて諾するものなかりしと、嗚呼其れ眞か、今の俳人、君の遺韵に薫せずして夫れ何を讀まんとするか。

然りと雖も遇と不遇は君が關する所にあらず、余曾て之を古人に聞く、仁者にして必ず

達せば閔損仕を汶上に辭せず、勇者にして必らず逆げば仲由纓を臺下に結ばずと、究むる所愈々深くして世に乖くこと益々遠く、望む所愈々高くして伴を失ふ益々多し、昔は子路孔子に問ひて曰く、君子も亦窮するかと、孔子答へて曰く君子なればこそ窮するなれと、君が世に容れられざるは容れられずして其大を見る。

藝術は獨創にあり、古人の後塵を拜して、飮餘以て足れりとするものは與に語るに足らず、我が簫を吹き我が琴を彈ず、是れ乃父の遺風にして又た子規先生の風骨なり、弱冠斯道に志して鋭意開發に努め、單身虎穴を探り龍窟を窮めて斃る、是れ高士の行ひにして凡人の學び得ざる所、余君が命の塞なるを悲んで益々風格の高きに服す。

蜩に墓冷ゆるまで立ち盡くす

序

昭和十二年二月朔、正に夕餉の箸を摑く時なりき。ラヂオニュースを聽き居たるに、河東碧梧桐翁病氣重態にて、豐多摩病院に入院しつるが、今、危篤に陷ると聞えしかば、予は愕然として、恰かも鐵椎を腦天に打ちつけられたるが如し。折も折感冒に罹りて咳嗽頻數、其の上例の痼疾さへ痛み出せる故、到底見舞に往く能はず。ふと今夜歸國するといふ三幹竹の在るに氣着き、直ちに代理として見舞に遣はす。暫時の後還り來れる其の報告は甚だ悲觀的なりき。而して翌二日のラヂオニュースは終に予をして絶望の淵に沈ましめたり。噫、碧翁は既に斯の世の人に非ず、最早とこしへに俳論を闘はすの機なしと思へば、言ふに言はれぬ寂しさ、ひし〳〵と胸に逼る。是の夜窓外は、霙まじりの雪さら〳〵と降る。

笠もいざ風雪の夜を三千里

ホ句せぬも在らばと寂し雪しづる

此の二句を胸中より手向けつゝ、思ひは三十年風交の跡を徂徠す。越えて二月五日午下、下谷梅林寺の告別式には、自動車に倚つて赴きぬれど、疾の爲め坐ること叶はねば、車中より靈位を遙拜し、力なく歸り來りぬ。爾來春風秋雨、事につけ物に觸れ、碧翁に就いて想ひ起さゞるはなし。

予が始めて碧翁と會へるは、明治三十六年四月中頃、入洛の際にして其の人と爲り嚴格容易に近づき難く覺えたれど、半面には至つて情味の濃やかなるを直感しぬ。其の時子規先生の行事を語り合ひ、特に其の宏量と親切とに、感激しつと告ぐれば、且つ頷き且つほほ笑みたりし碧翁の面貌もたしかに記憶す。

其の歳八月入洛の歸るさ、予を長良川の鵜飼見物に誘へば、水棹を從へて岐阜に赴き、即夜金華山下に溯りて遲鵜飼を觀る。俱に江崎の華園子（今の鵜平）方に宿り、翌日名古屋の觀魚庵に句會を開く。予は歸洛を急ぐ故、悤卒停車場に入りしに、適當なる列車なければ、三等車に搭ず。碧翁を始め、華園、觀魚、天籟等、態々プラットホームまで送られたり。

是の歳は、碧翁と會ふこと屢々なりき。臘月松山に歸省の途次入洛來訪の際は、予は風

邪にて臥せり居たるが、喜んで病牀に請じて款語す。

御疎末に見奉りし蒲團かな　碧梧桐

は是の時の詠なり。

三十八年四月二日には、吉野吟行の歸るさ入洛、十七日には水棹庵にて句會、碧翁を請ず。十八日相携へて、御室嵯峨の花に浮かる。天龍寺畔に隱棲せる把栗翁を驚かして、拳形の草餅の振舞に與り、落柿舍に轉じて、去來の小さき墓に佇みしこともありき。

三十九年五月には、碧翁、月兎（今の月斗）、墨水、觀魚、未央、鬼史、天籟、漠々、素石、及び予と水棹との十人、宇治の新綠に逍遙し、歸途朝日燒に立寄り、寄せ書などして、興に入りぬ。是の歳八月六日、愈々全國俳句行脚に出發す。この第一次行脚のはなむけに、粗末なる雙眼鏡を贈りて其のケースに

豆人となるまで送る夏野かな

の拙句をものす。懸葵に每號旅行中吟を寄せられつるが、何れも珠玉、以て當時の旺盛なる意氣を觀るべし。又旅行先より予に在り所を知らしむべく、所在片信と題して、隨處葉

書をおこせたり。そは懸葵に連載したるが、今之を讀めば碧翁が塵界の何ものよりも超脱して自然と融合しつゝ、旅より旅へと優游自適する狀、宛然覩るが如し。げに碧翁は東西南北の人にて西行法師、芭蕉翁を現代に見る心地す。

此の第二次行脚の時なりけん、予は北越を巡錫して、六月廿四日柏崎の某寺に宿る。碧翁も折よく同地に來合はせ、今宵訪問せんとの通知に、胸躍らせて待ち佗びたり。例の獨特の足取りにて見えつるは、其の夜八時すぎなりけり。奇遇にてもあり、久濶にてもあれば相互の眼にはうれし涙の露光りぬ。款晤一時間餘にして、名殘惜しくも還られんとす。即ち

巡錫中の俳行脚の碧梧桐子と柏崎に邂逅す
限りなきうれしさを語りてやがて別れぬ

俳行脚も筍時に弟子殖えん
夏霞君は果てなき旅に居て
今暫し蚊帳ふならば蚊遣せん

と走り書して示せば、第一句特に面白しと喜ぶ。當時碧翁と予との關係は、師弟といはんよりも、朋友といはんよりも、寧ろ兄弟といふ親しみを持てりしことを、今もつくづくしく思ふ。

其の後も數次の入洛來訪を受けつるが、くだ〳〵しければ、すべて略く。

さて愈々悲哀と寂寥との錯綜せる場面の展開せらるゝ秋とはなりぬ。そは大正五年か六年の初夏、新緑を吹き渡る風の肌さはりよき頃なりき。碧翁來訪、滔々として俳句の形式破壞論を强調し、予にも必ず贊成せよとなりぬ。

予はリズムを破壞せずんば、往き詰まつて、其の生命を失ふ如き俳句は決して眞の藝術に非ざる旨を痛論し、百方其意を飜さしめんとしつるが、騎虎の勢に驅らるゝ碧翁は頑として聽かざりしぞ口惜しき極みなりける。是れ實に碧翁と予とが、句に關して言を交へたる最後なりき。予は斷言す。廣く藝術家としての碧翁を月旦したらんには、此の擧、或は一種の功績と謂はれんか、狹く俳人としての碧翁を品定めせんには、確かに一生の錯誤なりと。其の後、碧翁とは、鳴雪翁逝去の際又は劇場の廊下等にて、時々面を合はすことありても、打融けて語らへることは未だ嘗てあらざるなり。

然るに昭和十年春近畿の俳人が、予が華甲の壽讌を京都ホテルに催されし時、思ひきや碧翁が悲々出席し、來賓一同に代りて、鄭重なる祝辭を述べられんとは。予は衷心より感激し、答辭の結尾に、碧翁には速かに其の轍を改めて正しき俳道に復歸し、以て晩節を全うせられたし、是れ實に予一人の切望のみに非ず、又滿堂諸君の切望なりと聲涙俱に下りつゝ絶叫せしが、何の效果もなし。予の遺憾知る人ぞ知らん。

十一年臘月より十二年一月にかけ、切に碧翁に會はまほしく、拙句集夢の跡を携へて訪問せんとせしが、疾の爲めとかく躊躇しつる間、暴かに幽明境を異にするに至りぬ。聞く所に據れば、華甲壽讌以後、碧翁の行動には、多少悔悟の事實ありしが如し、さらば天若し假すに年を以てせんには聰明絶倫の彼ゆゑ、一旦飜然正しき俳道に復歸したらんとも知るべからず。

昔、宗祖親鸞聖人と聖覺法師とが現當二世の親交なりしことは、苟くも淨土眞宗を奉するものゝ、齊しく欽仰して措かざる所ならん。又下河邊長流大人と契沖阿闍梨との交誼は江戸時代文學史上、永久の美談たり。然るに碧翁と予との關係が、斯樣の儘、幕を閉ぢた

るは慚愧とや謂はん、痛恨とや謂はん。半夜一念此に及ぶ毎に惻々胸を拊つものあり。碧翁の性格は、純眞、明朗、恬澹、骨鯁、篤厚、人を導くには鐵如意を揮つて逼り來る禪僧的の嚴格あり。

其の半面には、小春日和に飴をし孫に舐ぶらせながら、子守唄を歌ふ祖母的の愛撫あり。其是を是とし、非を非とし、單刀直入、毫も遲疑せぬ所より察すれば、若し是の人をして淺野長矩の遺臣として元祿時代に在らしめば、蔫直に大石良雄の傘下に走りしならん。其定型時代の句は、淸新、絢爛、奇拔、跌宕、溫籍、素樸、適々として佳ならざるはなし。其の才力の奔放、時に芭蕉翁に駕し、時には蕪村翁を凌ぎぬべし。唯第二次行脚時代の作には、聊か詩想の枯渴したるが如きものなきにあらざるは、白璧の微瑕とや謂はん。之を要するに、其の一代の大家なり、子規先生門下第一の逸材たり、明治、大正文學史上、重要なる地位を占むることは、否定すべからざる事實とす。

頃者門人小鮎子、其定型時代の句を整理し、版に付して廣く世に示さんとし、予に序を需む。予は今、離羣索居の身、序跋、揮毫等の要求は、大抵之を拒絶せり。されど此の一

事のみは、碧翁に對する情誼上、すげなく拒絶するに忍びず。乃ち疾を力めて三十年離合の跡と其の人物並びに句に對する管見とを書して小蛤子に與へ、且つ小蛤子の師に孝なるは豈に其の篤厚に感激して之を學ぶか。持つべきものはよき弟子なりけりと獨り言して筆を投ず。讀者或は是れ序にあらで追懷錄及は誄德文のみと嘲らんか。そは其の心のまに〳〵

昭和十四年霜月中浣第四日

しと〳〵降る冬の雨を聽きつゝ

師子窟主人　　句佛拔涙識

凡例

一、本集は明治二十七年、子規居士編「二葉集」以降「新俳句」「春夏秋冬」子規居士選「日本」俳句及び「ホト、ギス」通卷。それに碧梧桐先生御專管の新聞「日本」及雜誌「日本及日本人」に掲げられし作品などを主とし、外に明治時代の各俳句雜誌其他、御手記、旅行手帖、揮毫物等より約七千の定型句を蒐め、そが中より約半數の作品を抄錄せるものなり。

一、右を細別すれば、春八百十四句、夏九百〇八句、秋千百〇五句、冬七百六十九句、新年五十二句、合計三千五百四十八句にして編者としては素より師の吐囑はそが一句とても逸する能はざるものなれども紙幅の關係にて已むなく上記に止めたる僭越は深く先生及讀者諸賢に謝す所なり。

一、本集發行に際し許諾を與へられし河東家及び關係の各位並びに先生御生前の知己たる佐藤紅綠先生及び句佛上人が御繁務中にも不拘特に本集並びに編者のため貴重なる高序を寄與せられ更に青木月斗先生が御近親としての一文を賜はりたる御厚意は首尾照應、共に編者の深く光榮とする所なり。

昭和庚辰睦月

亀田小蛤識

碧梧桐句集　目次

春之部

時候

春浅……一　長閑……四　暮春……一〇
春寒……一　麗……五　行春……一〇
二月……二　日永……六　三月盡……一〇
冴返る……三　春夕……七　春盡……一二
暖……四　春宵……八　春名殘……一二
三月……四　朧……九　夏近……一二

天文

初雷……一三　春雨……一七　風光る……二一
霞……一四　東風……一八　春日……二三
陽炎……一六　春風……一九　春月……二三
春雪……一六　花曇……二一

地理

残雪……二四　春水……二七
雪解……二五　春の海……二九
別霜……二五　春山……二九
水温む……二六　春の潮……二九　焼山……三〇
春田……二九　苗代田……三一

人事

初午……三三　雛……三六　草摘……四三
摩耶参……三三　風……三七　木の実植う……四三
薪能……三三　塞……三九　出代……四四
列見……三四　合……四〇　野遊……四四
紀元節……三四　雁風呂……四〇　踏青……四四
櫻花節……三五　踏……四〇　汐干……四四
涅槃会……三五　二日灸……四〇　草餅……四五
彼岸……三五　畑打……四一　鞦韆……四六
西行忌……三五　蒔……四一　木……四七
針供養……三六　井……四二　茶摘……四七

桑摘……四八　菊根分……四八　蓮根掘……四八

動物

猫戀……四九　鳥交る……五七　螺……五九
鶯……四九　鳥の巣……五七　蜂……六〇
歸雁……五〇　孕雀……五七　蠶……六一
雲雀……五一　雀子……五七　虻……六三
雉子……五三　蛙……五八　田螺……六三
燕……五四　柳……五八　鮠……六四
囀……五五　白……五九　蜆……六四
呼子鳥……五六　若鮎……五九　魚寄……六四
獺魚祭……五六　諸子魚……五九　居虫……六四

植物

梅……六五　彼岸櫻……七〇　遅櫻……七七
紅梅……六七　初櫻……七〇　海棠……七八
桃……六七　櫻……七一　梨の花……七八
椿……六八　（花、落花）　躑躅……七九

連翹……八〇　木瓜の花……八六　茅花……九〇
辛夷……八一　李の花……八六　水入菜……九〇
松の花……八一　馬酔木花……八六　青麥……九〇
木蓮……八一　下萌……八七　蓬……九一
柳……八三　蘆の芽……八七　虎杖……九一
木の芽……八三　名草芽……八八　豆の花……九二
藤……八三　芒……八九　杉菜……九三
山吹……八三　櫻草……八九　菠薐菜……九三
菜の花……八四　薺……八九　山葵……九三
大根の花……八五　芹……八九　若布……九三
蓴……八五　蕨……八九　海苔……九三
菫……八五　獨活……九〇

雜……九一―九八

夏之部

時候

五月……九九　夏夕……一〇二　旱……一〇五
六月……九九　暑雨……一〇三　梅雨……一〇六
短夜……一〇〇　涼し……一〇三　土用……一〇六
日盛……一〇一　炎天……一〇五　秋近……一〇七

天文

卯の花下し……一〇八　薫風……一一　雲の峰……一一五
五月雨……一〇九　青嵐……一一三　夏雲……一一七
夏の雨……一一〇　黄雀風……一一四　夏の月……一一七
夕立……一一〇　雷……一一四

地理

清水……一一九　夏野……一一〇　夏の海……一一三
夏川……一一〇　夏山……一一三　青田……一一三

人事

更衣……一一四　夏衣……一一五　夏羽織……一一五
袷……一一四　單衣……一一五　帷子……一一六

羅……一二六
松前渡り……一二七
矢數……一二七
競渡……一二八
競馬……一二八
佛生會……一二八
新茶……一二九
幟……一二九
菖蒲太刀……一二九
粽……一二九
菖蒲葺……一三〇
蘭湯……一三〇
藥日……一三一
藥草摘……一三一
藥玉……一三一
竹醉日……一三一
祭……一三一
草合……一三一
御秡……一三二
夏行……一三二
青簾……一三三
扇……一三三
團扇……一三四
掛香……一三五
夏痩……一三五
夏帽……一三五
編笠……一三五
簟……一三六
竹婦人……一三六
日傘……一三六
風鈴……一三七
鮓……一三七
心太……一三八
田植……一三九
田草取……一四〇
繭……一四〇
水飯……一四〇
乾飯……一四一
富士詣……一四一
雨乞……一四二
火串……一四三
蚊遣……一四三
納涼……一四四
起し繪……一四五
甘酒……一四五
煮酒……一四五
氷餅……一四六
氷室……一四六
蟲干……一四六
蠅叩……一四七
打水……一四七
晒井……一四八
漬瓜……一四八
梅干……一四八

沖膾……一四九
葛水……一四九
晝寐……一四九
川狩……一五〇
鵜飼……一五〇
川牀……一五三
蚊帳……一五三
水泳……一五三
行水……一五三
裸……一五四
避暑……一五四

動物

時鳥……一五六
閑古鳥……一五七
水雞……一五八
行々子……一五八
浮巢……一五九
蝙蝠……一六〇
鰹……一六〇
鮎……一六〇
金魚……一六二
蛇……一六二
蛇の衣……一六三
火取蟲……一六三
螢……一六四
蝸牛……一六六
毛蟲……一六七
蟇……一六八
蟬……一六九
蠅……一七〇
蚋……一七一
雨蛙……一七二
翡翠……一七二
蜘の子……一七二
蚤……一七二
飛蟻……一七三
水馬……一七三
蛭……一七三
子子……一七四

植物

桐の花……一七五
餘花……一七六
夏藤……一七六

杜鵑花……一六
槐の花……一七
合歡の花……一七
花楝……一七
柿の花……一七
栗の花……一七
櫻桃……一七
枇杷の實……一七
青梅……一八
早桃……一八
林檎……一八
若葉……一八
青葉……一八
夏木立……一八
木下闇……一八
茂……一八
夏柳……一八
松落葉……一八
凌霄花……一八
薔薇……一八
茨……一八
百日紅……一八
十薬……一八
若筍……一八
竹……一八
柚の花……一八
玉卷芭蕉……一八
青梅……一八
桃……一八
橘……一八
牡丹……一九
芍……一九
葵……一九
芥子……一九
百合……一九
茅花……一九
夏菊……一九
撫子……一九
紫陽花……一九
著莪の花……一九
夕顏……一九
花菖蒲……一九
杜若……一九
蓮……一九
蓮浮葉……一九
河骨……一九
蓼……一九
蓼……一九
蓼……一九
萍……一九
麻……一九
綿の花……一九
苺……二〇
瓜の花……二〇
瓜……二〇
夏大根……二〇

麥秋……二〇三
畫顏……二〇三
青芒……二〇三
夏草……二〇三
苦の花……二〇三

秋之部

雜……二〇五——二〇九

時候

立秋……二一一
初秋……二一一
殘暑……二一二
朝寒……二一二
肌寒……二一二
うそ寒……二一二
冷か……二一三
秋晴……二一四
寒行……二一五
長暮……二一七
暮秋……二一八
夕冬……二一九
秋の夜……二一九
秋行……二二〇
暮の秋……二二〇
九月盡……二二〇
近……二二一

天文

初嵐……二二二
秋風……二二二
分野……二二四
秋雨……二二五
秋時雨……二二六
秋の空……二二七

秋の雲……二三八
稲妻……二三八
天の川……二三九
星月夜……二三〇
盆の月……二三一
三日月……二三一
（名月、月見、無月）
後の月……二三六
霧……二三七
露……二三九
露時雨……二四二

地理

秋の山……二四三
秋の水……二四四
初潮……二四四
花野……二四五
落し水……二四五

人事

七夕……二四七
高きに上る……二四七
燈籠……二四七
墓参……二四九
大文字……二四九
楓……二五〇
踊……二五〇
三井詣……二五〇
鬼貫忌……二五一
去来忌……二五一
太祇忌……二五一
子規忌……二五一
扇置……二五一
扇置……二五二
新酒……二五二
濁酒……二五四
柚味噌……二五四
澀搗……二五五
新蕎麦……二五五
砧……二五六
相樸……二五七
花火……二五九
海鼠打……二五九
秋の蚊帳……二六〇

行水……二六一
名残……二六一
案山子……二六一
鳴子……二六二
添水……二六二
引板……二六三
稲刈……二六三
掛稲……二六四
稲筵……二六四
籾摺……二六四
米……二六五
大根蒔……二六五
崩れ梁……二六五
鹿垣……二六五
漆……二六五
新棉……二六六
掛烟草……二六七
猿……二六七
酒……二六七
鍬……二六八
漬……二六八
笛……二六八
初……二六八
獵……二六八

動物

鹿……二六九
雁……二七〇
渡り鳥……二七三
啄木鳥……二七四
鶉……二七四
鳴……二七四
百舌鳥……二七五
鶺……二七六
鶯……二七七
眼……二七七
白……二七七
鶸……二七八
鱸……二七八
鰡……二七八
鯽……二七八
落……二七九
鮎……二七九
江……二八〇
鮭……二八〇
沙……二八〇
魚……二八〇
蟲……二八一
蟲選……二八三
（蟲合）
蛉……二八四
赤蜻……二八五
蛉……二八六
蠅……二八六
蟻……二八六
蟲……二八七
蚯……二八七
蚓……二八七
鳴……二八七

秋の蠅……二八七
秋の蚊……二八八
秋の螢……二八八
雀蛤となる……二八九

植物

木犀……二九〇
紅葉……二九一
櫨紅葉……二九四
白膠木紅葉……二九四
櫻紅葉……二九四
柿紅葉……二九五
散柳……二九五
梨……二九七
銀杏黃葉……二九七
柘榴……二九八
梅檀の實……二九八
木の實……二九八
柿（柿秋）……二九九
栗……三〇一
桃の實……三〇三
柚……三〇三
木槿……三〇三
萩……三〇五
芭蕉……三〇七
破芭蕉……三〇八
紅芙蓉……三〇九
菊……三一〇
梅……三一三
芒……三一三
棗……三一五
山木……三一五
常海棠……三一五
鬼灯……三一五
朝顏……三一六
桔梗……三一六
紫苑……三一七
女郎花……三一七
男郎花……三一八
秋七艸……三一八
曼珠沙華……三一九
野菊……三二〇
雞頭……三二〇
雁來紅……三二一
蘭……三二三
稻の花……三二三
稻……三二三

落穗……三二三
蕎麥の花……三二三
唐辛子……三二四
鳳仙花……三二五
月草……三二五
蓼の花……三二六
草の花……三二六
蘆の花……三二六
芋……三二八
砂糖木……三二九
黍……三二九
粟……三三〇
稗……三三〇
南瓜……三三〇
烏瓜……三三〇
瓢……三三一
糸瓜……三三一
枯……三三二
蓮……三三四
蔦……三三五
蔦紅葉……三三五
草紅葉……三三六

雜……三三七——三四二

冬之部

時候

初冬……三四三
小春……三四三
短日……三四五
冬の夜……三四五
冬され……三四六
寒さ……三四六
寒の入……三四九
つめたき……三五〇
冴ゆる……三五〇
走……三五〇
年の暮……三五一
行年……三五二
大三十日……三五二
除夜……三五二
春隣……三五三

天文

時雨……三五四
寒月……三五九
木枯……三五六
雪……三五九
北風……三五七
吹雪……三六四
冬空……三五七
霰……三六五
冬の月……三五八
霙……三六七
霜……三六七
寒の雨……三六九
冬の日……三七〇

地理

枯野……三七一
冬の川……三七三
冬の山……三七三
水涸……三七四
山眠る……三七二
冬田……三七四
氷……三七五
氷柱……三七六
冬の海……三七七

人事

神の旅……三七八
吹革祭……三七九
神楽……三七八
蕪村忌……三七九
雑魚寄……三七八
臘八……三七九
十夜……三七九
寒念佛……三八〇
鉢叩……三八〇
毛……
薄團……三八〇
足袋……三八二
布……三八二

綿帽子……三八三
狩……三八三
獵……三八三
冬構……三八三
雪囲……三八四
雪沓……三八四
綿入……三八五
冬籠……三八四
紙子……三八六
玄猪……三八六
火燵……三八六
火桶……三八八
温石……三八九
懐炉……三八九
炉開……三八九
囲炉裏……三九〇
炭……三九〇
胼……三九七
水洟……三九八
避寒……三九八
野施行……三九九
婆……三九九
湯婆……三九九
蕎麦……三九九
納豆……三九九
麦……三九九
寒……三九九
室……二九四
阪……三九九
鳥……三九九
乾……三九五
網……四〇〇
代……四〇〇
鮒……三九五
漬……四〇〇
柴……四〇〇
煮……三九六
凝……三九六
事……四〇一
風呂……三九六
吹……三九六
拂……四〇一
酒……三九六
餅……四〇二
卵……三九七
搗……四〇二
寒……三九七
紅……三九七
古……三九七
古……三九七
寒……三九七
風……三九七
邪……三九七
暦……四〇二

動物

狼……四〇三
鯨……四〇三
鹿……四〇三

千鳥……四〇四
水鳥……四〇六
鴛鴦……四〇八
鴨……四〇八
冬の雁……四〇九
笹鳴……四一〇
鶺鴒……四一〇
冬の蠅……四一一
河豚……四一一
海鼠……四一一
牡蠣……四一二
雪蟲……四一三

植物

山茶花……四一三
返り花……四一三
寒梅……四一五
茶の花……四一五
紅葉散……四一六
枯柳……四一六
冬木立……四一七
枯蜜柑……四一九
枯木……四一九
冬牡丹……四一九
冬薔薇……四二〇
水仙……四二〇
椿……四二三
落葉……四二三
銀杏落葉……四二四
枯菊……四二四
枯芒……四二〇
枯蘆……四二九
枯芝……四二九
枯草……四二九
冬枯……四二八
枯尾花……四二一
枯茨……四二一
枯荼……四二七
蕪……四二六
大根……四二六
葱……四二七

冬雑……四二三——四二七

新年

元日……四二九
明の春……四二九
花の春……四二九
新年……四二九
正月……四四〇
松の内……四四〇
松納……四四〇
日初……四四〇
蓬莱……四四一
門松……四四一
輪飾……四四一
床飾……四四一
飾臼……四四一
若水……四四二
蘇……四四二
禮……四四二
積……四四二
餅……四四二
春……四四二
初……四四二
卯……四四五
駒……四四五
猿……四四五
曳……四四五
歳……四四四
萬……四四四
手……四四四
毬……四四四
着衣始……四四三
七草……四四五
初……四四三
左義長……四四六
荷……四四三
藪入……四四六
初……四四三
雞……四四六
初……四四六
始……四四三
嫁が君……四四六
初……四四四
福……四四四
寿……四四四
草……四四七
遣羽子……四四四
羽子板……四四四

春之部

時候

春淺き　春淺き水を渉るや鷺一つ

西門の淺き春なり天王寺

春淺き一日鳥來ぬ鴨場かな

遠州好みの庭とや瘤木春淺し

春寒し水田の上の根なし雲

水餅や餘寒の水に殘りある

春寒き宵の焚火にあたりけり

繭玉を解く日の春の寒さかな

春寒き廓の中や流れ川

汐落ちて貝掘りそむる春寒き

春寒き松の芽生や苗どころ

春寒し子の愛憎に我を耻づ

百貨動き初めし港の餘寒かな

島人と芋植うる話餘寒かな

春寒き賜杯の祝ひ舟を泛ぶ

磯岩に飛び岩の鵜も餘寒かな

御弔事

二月　如月の神にぞならせ給ひける

冴返る

鶴の羽や白きが上に冴返る

従軍行

馬と寐て薄き藁なり冴返る

流氷のいつ戻りけん冴返る

瀬戸潮の渦に吸はれて冴返る

聯かけて双峯と見るや冴返る

南部鈴馬行くと知るや冴返る

臼心早き精げや冴返る

夢にとゞろ神鳴りせしが冴返る

能を想へば耳に鼓や冴返る

暖

水鳥の暖かき潮に流さるゝ
暖き乘合舟や菅の笠
暖き門や木入れの馬の糞
上汐を吹くほのぬくき夜風かな
暖かや畫一トさかり植木市

三月

三月を引くとも見えで波のうつ
長閑蹴合ひ居る雞追ふ人も長閑かな
長閑なる水暮れて湖中灯ともれる

麗

麗に伊豆漕廻る艪聲かな
うらゝかや木瓜ちり布て庭の芝
うらゝかに伏水上りや舟の幸
うらゝかに春の松露を掘る日哉
空うらゝ草を摘んでは仰ぎけり
うらゝかや敎へも倦まで游ぶ時
塔を見る心うらゝに匠かな
うらゝかや殘る氷の漂へる
雲うらゝ敷浪を又砂子かな
わしが城と川舟唄もうらゝかに

日永

古塀や遅き日ざかり土落つる

日永さの門前に車多きかな

永き日の旅人を見る御寺かな

西の宮の酒の糟をもらふ

糟汁も大阪風に日永かな

比叡の坊焚出し竈に遅日かな

吉野記行

宇陀の辻饅頭ふかす日永かな

かゝり居る舟や日永の烟吐く

天領の銃音慣れて日永かな

嵯峨半日

法話より詩話の遅日や把栗寺

永き日の阿音教ふる啞生かな

砂が森には木材を積む巨船見ゆ

海に浸る檜の匂ふ遅日かな

蜜とれば雞も戻りて遅日かな

永き日や羽惜む鷹の嘴使ひ

花漬を買ふや遅日に枕して

入り口は日永大和を山河内

春夕

地震知らぬ春の夕の假寐かな

糢糊として春夕暮の臺かな

汐畑立ちまさる春の夕かな
春の夕なほも焙爐のほのぬくき

春宵

かたみわけのよき衣悲し春の宵
白馬に使者にほやかや春の宵
養生の酒色に出づ宵の春
幟さへ兩座芝居や春の宵

春宵

諏訪様や春の夜毎の二弦琴
春の夜やねむたうなりて燭の下
春の夜や送別にする歌がるた

春の夜の家並格子に洩る灯かな
春の夜や旅中の興に胡弓ずり
御材曳の人數の宿や夜半の春
こたびは夫婦して參りたり夜半の春
春の夜や長汀を行く曲浦の灯

吉野記行

五十町上れば灯す朧かな
文の端朧に見ゆれ去來丈
朧なる水澄みわたる流れかな
所柴も溫泉漬の味や朧夜に

暮春　漁りの領　爭ひや暮の春

詩に靜處句に把栗寺や暮の春

德本に問ふ草のある暮の春

天草に春暮るゝ思ひ甘草に

行春　行春やウシをはごくむ蟻の業

行春や高島考にある渡し

三月盡　行燈に三月盡の油かな

春盡　神怒りし給へり句境春盡きて

此日の寒さ酷寒に似たり

藤樹書院

絹なりし遺衣そゞろ春盡の情

古白追悼

春名殘　追善や春の名殘を雨がふる

夏近　夏近く萩は菊より伸びて居り

水郷の柳畑や夏近き

しきりつく筏に夏の近きかな

夏を待つ一日二日や橋供養

吹く風に灯置きたり夏隣

舟楫の通ずる里や夏近き

夏近き犬の病もおそろしき

夏近き試錐も海邊櫓かな

天文

初雷

裏山に初雷の雲かゝりけり

初雷や梅颯然と風に散る

初雷やふるふが如き雛の壇

初雷のごろ〳〵と二度鳴りしかな

初雷や横帆にうけて武庫瓜

初雷や晒布の上に雲一片

初雷や金座の黄金鳴らす時

吾旅も南さす日や初雷す

境に入つて國の禮問ふ霞かな
大津畫やかすむ湖水の七小町
霞む日や岬をありく松林
鷹が鳴く峠を越すや畫霞
山城に上げ添ふ旗の霞かな
葛城も丸き山なる霞かな
大きなる港に作る霞かな
熊の來て牛闘ひし霞かな

道山沿になりて足下平館海峽を見ろ

風立てば霞の奥も波白し
北の海に人呼ぶ鳥や夕霞

さし尾にや鴉の落す霞かな
庭木など寄進を思ふ畫霞
南部領まで數ふ溫泉や山霞む
宋柘を敕に求むる霞かな
渡りたさをせめて堤や夕霞
藁游びする野の聲や夕霞
十勝野に我立つと四顧の霞かな
返事には妻な人來ぬ夕霞
史微闡けて洞窟開ゆ霞かな
三尺松鉢よきも見出づ畫霞
山霞む山にも運河記念林

陽炎

陽炎やふり〳〵馬の尾にも立つ

陽炎に鹿の尾もゆること一寸

ほのぬくき陽炎立つて子持石

陽炎や糠こす麥の小一斗

春雪

沫雪や日のてりがちに西の岡

母衣を引く馬の稽古や春の雪

淡雪や麥畑見ゆる島がかり

江の島の浪高き日や春の雪

鴨涯の詩や春雪を詠じけり

淡雪や鮠釣に出づ朝曇

淡雪や氷跡なき湖の上

淡雪や蠶神祭の幟立つ

一トしきり蟹漁る海や春の雪

三條を渡る首途や春の雪

春の雪寸積むといふや燭の下

春雨

春雨や一向專念の夜もありて

灯ともすや供養の謠春の雨

春雨や諸國荷船の苫の數

種馬につけにやりけり春の雨

井田のべべッ小村や春の雨

春雨や何彫る君の不退轉

杉苗を積む舟ばかり春の雨

天草行には連るべきを無沙汰春の雨

寺らしう庫裏なりぬ雞舍の春の雨

東風

荷かさむ問屋主や東風心

春申君

東風吹くや門標を見て家到る

翠島庵

魚活けて君待てばけふも〳〵東風

春風

春風や道標元祿四年なり

音樂や船中流に春の風

川崎

麥藁の虎が鳴くなり春の風

門を出て五六歩ありく春の風

カナリヤの夫婦心や春の風

公園の借馬に乘るや春の風

馬の市馬の子も來る春の風

春風の乞食芝居も鬘かな

春風や西鶴は行く女護島

虎の威を奴が髯や春の風

汐汲みに戀語るらん春の風

春風やよき木を入れる木屋の富

春風に八ッ手の古葉落つるなり

春の風熱田の不思議語りけり

八阪の能大原女も見る春の風

棒に讀んで何の落首や春の風

奉公を僧介添や春の風

春風や見惚れし繪馬を思ひ行く

春風や劔の柄ぶり草結へる

衣冠思へば皆春風の熊野落

春風の鸚鵡石吉備津游女等が

悼廣瀬中佐

花曇いくさ神になる人ひとり花曇

吉野記行

女ども峠こす日や花曇

風光る

楠の芽に日のさし風の光るかな

水打つて棹の神事や風光る

朝凪の浪打つて風光る頃

肥前肥後

火の國も海の前後や風光る

春日

海月白き潮あざやかに春日かな

春日さす疏水の水に諸子魚かな

礎に門と見る大樹春日かな

春月

柳もなし籬の上に春の月

曲すみし笛の餘韻や春の月

五六騎のゆたりと乘りぬ春の月

春月や上加茂川の橋一つ

薄き木立丸き水澤や朧月

藪の中の家の花見ゆ春の月

姉沼の謂れ尋ぬ知る朧月

香椎に暮れて瑞垣の高さ春の月

地理

殘雪　殘る雪鶴郊外に下りて居り

吉田口あまたの雪の殘りけり

峰つゞき森深き山や殘る雪

アイノ村に廣島村や殘る雪

爐滓捨てし裏も見るなり殘る雪

凸丘の凹村を行く殘る雪

椿落て義經寺や殘る雪

雪解　磯山のひらゝかな雪解かな

雪解に阿闍梨の笠や阪迎

雪解水書架の上より流れけり

一番の渡り漁師や雪解風

梅搜庵に在ること三旬

家として珠履を躡み出づ雪解かな

浦風や雪解なぐれの寄り昆布

映紫樓が檜笠に

汐烟に解けし雪汁染みにけん

別霜　別れ霜葉牡丹の青き葱の黄なる

別れ霜走り茶を摘むたよりかな

掛け昆布や霜の名殘の三棹程

根ッ子燒く烟絶えずよ春の霜

春霜や椄臺植うる蜜柑山

ふためきて蠶掃きしが別れ霜

伊那荒れの別れ霜木瓜眞盛り

水溫む

朝寐する異な旅人や水溫む

井戸水に蠛(みかの)みえそめ溫みけり

蜻蛉虫おぞと這ひけり水溫む

貝を生けし笊沈めしが水ぬるむ

釣半日流るゝ煤や溫む水

廓ほとり炙師住みけり水溫む

名匠に待つ月日水も溫む頃

藤樹書院は宮境内か水溫む

磧馴れしを水溫む鹿の跡も見て

春水

上京や友禪洗ふ春の水

弘法網掛松

法の網かけたる石や春の水

木屋町や裏を流るゝ春の水

蛇穴を出でゝ石垣の春の水

溯りて君を迎へぬ春の水

春の水古柴網にかゝりけり

墾く山淺き谷間や春の水

舟橋のある小城下や春の水

平館に砲臺の跡存す

搆へたる並松もあり春の水

山の名を石鐵縣や春の水

多羅葉に日影滿ちたり春の水

春水や晒しやう見る紙處

藺倉の高さ白さや春の水

舟行百里と碑林の記にも春の水

春の海　城中の雨意　島原や春の海

春の潮　ひた〳〵と春の潮打つ鳥居かな

春田　慈姑など葭も忘れ芽淀春田

首洗井の森や春田を落つる水

春山　大佛を寫眞に撮る、や春の山

頂の森いつ失せて春の山

從軍行

金州や子規子も行きし春の山
道となく牧車通へり春の山

恬堂庵即事

背に近くもたれ心や春の山
春山や處の軒端なる
ゆるき流れ遠々と春の峯秀づ

山焼

山焼きに出て夜雉を逐ふくらき哉
裏を焼く端山に見ゆる焔かな
焼山や夜祭をする山の町
山焼や神の松明投げてより

山焼けば狐のすなる飛火かな
蝦夷に渡る蝦夷山も亦た焼くる夜に
ひもろぎの火を借る兒や山焼衆

焼野

道芝のくすぶつて居る焼野かな
焼野來し川風に乘る渡かな
土人住む尺地もなげに焼野かな

苗代田

苗代と共にそだつる螢かな
畔豆の芽生もうれし苗代田
兎角して根岸野に出る苗代田

時ならぬ出水かしこき苗代かな

風垣を結ひそふ磯田苗代かな

人事

初午　加賀屋敷初午に行けば謠かな

初午の太鼓地に据う群衆かな

初午や羽田の松に時計臺

摩耶參　尾をつゝむ馬古めかし摩耶參

薪能　薪能の果てるや薪盡くる頃

月もありて芝生の露や薪能

四處の薪御能の拍子かな

薪能小面映る片明り
脇僧の寒げに暗し薪能
御ともしや薪の御能みそなはす
笛方のかくれ顔なり薪能
地取りして能の薪を運びけり

列見

伶人や列見ある日のかづけもの
いかめしく兵部まさりて列見かな

紀元節

玉綴る梅大赢の佳節かな
久米舞の庭のいさごや梅花節

鉾立てゝ紀元の佳節輝けり

櫻花節

鉾とらば裓を纏はゞ櫻花節

嵯峨半日

涅槃會

把栗寺の涅槃も雛も同座かな
藁塚の藁家の中や涅槃寺
灯照らせば灯に微妙音涅槃像

彼岸

山の墓地つゞじ折り插す彼岸かな

西行忌

伊勢人や庵の存す西行忌

西行忌浪化俳諧に秀でたり

西行忌茶もいと淡くなりにけり

像の前刀置かする西行忌

針供養

針山をしつらひ直す供養かな

針山の糸つけ針も供養かな

祝「日本」六千號

針祭筆の供養もする日かな

雛

小さき菱餅桃のさかざる枝

雛市や隅田の夜風灯吹く

廓の雛屏風ひそかに灯のともる

熊阪の雛ゆゝしや能衣裳

向き〳〵に花笠雛の手ぶりかな

紙礫打たれん雛が下座に居て

右近櫻あれど守る雛なかりけり

道中雛右富士の松むら立てる

雛立てゝ見まさるを言ひよどまずも

倉に巣へば親し雀に雛仕舞ふ

凧

夕暮のいつもの星や凧

吹きつれて南になびく凧

ちさい子の走りてあがる凧
凧百間の絲を上りけり
紙鳶籬の中より上りけり
つり糸をつける凧屋の女房かな
凧糸の藁を散すや藁庇
下ろす間も俄かなる風や凧
凧置いて雞やかくれし箕のほとり
母と子の不時の上りや凧の空
船卸しせし旗の上や凧の數
牧場の柵に上るも凧場かな
再びせぬこの渡り凧も鳴る空や

爐塞

午過ぎの火燵塞ぎぬ夫の留守
釜持ちの左千夫が會や爐の名殘
島原や火燵塞ぎを淋しがる
爐はなくてしまう安火や草の宿
暖爐納めて櫻たわわに插しにけり
爐疊のはみいづる藁を佗びにけり
三つの爐の帽爐はいつか焚かずなりぬ
驛鈴をしばきく日なり爐塞ぎぬ
繼足を思ふ柱や爐の名殘
爐塞いで膝下に參ず笞かな

灘を來て名殘爐に干魚燒く泊り

雞合　この日この名譽の雞となりにけり
しさり合ふ別れになりぬ雞合

雁風呂　雁風呂や小舟漕ぐなる薪拾ひ

繪踏　警むる繪踏の寺や雞の聲

二日灸　馬で來て灸師だのみや二日灸
腕白を裸にむぎぬ二日灸

兩肩の富士と淺間や二日灸
二日灸木辻の君もすゑに來る
そうやうなことというて二日灸せずよ

畑打　畑打の四五人寄りし晝餉かな
牛繫ぐ松あるや畑打
兵村の歌うたひけり畑打
あら〳〵に鋤きし田水や鷺の來る
耕や順民に地を與へけり

種蒔　種蒔くや椎の庵の木の下に

種卸休めし畑も鋤き急ぐ

殘る棚夕顔の種蒔きにけり

笠寺へ昔の道や種を蒔く

大臼でするならひなり種選み

種井

休め田の廣々とある種井かな

子烏の鳴く種つけのまだ寒し

川柳花白きとぶ種井かな

槻一樹ある一郷の種井かな

草摘

丘の畑打つ人多し草を摘む

空うらゝ草を摘んでは仰ぎけり

摘草や飾磨赤穂の夕烟

摘草や皇子ませし時の樹の下に

摘草や知らぬ狐のくさめ花

摘み蓬禁厭ふ守袋かな

木の實植ゑ

畚のもの木の實を植うる翁かな

山里や木の實を植うる捨畑

山持つて自ら木の實植ゑにけり

つぶらなる木の實埋むや庭の隅

旄に似て翼ある木の實植ゑにけり

木の實植ゑてみまかりし人の後圖かな

説林の書に見て木の實植ゑにけり

出代

出代の下女あはれなる荷物かな

出代にいひかはしたる文もなし

野遊

野に遊ぶ歌に行人唱和かな

踏青

芳しき芝なだらかに踏み辷る

いち遲き船も卸して青を踏む

汐干狩

四五本の棒杭殘る汐干かな

少し汐干く少し汐干の人だかり

汐干して色焦したる女かな

人を見て蟹逃足の汐干かな

汐干いて川裾砂の流れかな

閘門を藻草閉ぢけん汐干かな

いつものこと汐干雨空灰の降る

島原城跡

一揆潰れ思ふ汐干の山多し

何焚く火汐干戻れば隣家に

草餅

挽餅の齒につく草の匂ひかな

色つけぬ餅も少しや草の餅

草餅や物日の獅子も三井の茶屋

紹の色似て似ぬ餅の蓬かな

凡そ摘みて干しも殘さず餅蓬

餅蓬も雪交り摘みし首途かな

鵜平居

狐狸を徳とす藪主に草餅日あり

鞦韆

鞦韆や蜑の子も庭に入れるなり

やごとなき二條館や半仙戯

夜半の花鞦韆に來る天狗かな

椄木

桑生て椄木もせざる芽生かな

はびこりし李切りすて椄木かな

野茨を臺木に掘つて戻りけり

梅椄ぐや桃の椄木をかたよせし

雉子追うて椄木畑へ出たりけり

榛の中川沿ひ畑の椄木かな

茶摘

二三日お茶場の茶摘賑ひぬ

小松伸びて境限れる茶山かな

把栗寺や茶を摘む頃の豆の花

頂きに上るうれしき茶山かな

茶山戻り池寄りす夕日隈なきを

桑摘　富士晴れぬ桑つみ乙女舟で來しか

菊根分　根分したる菊に少しの梅散りし

蓮根掘　堀の蓮この頃に掘りかへしけり

沼芹の花美くしや蓮根掘

隅々の掘りも殘さず蓮根かな

動物

猫戀　市中や廣い原中猫の戀

鶯　我庵は粥の薄きを鶯を

臺町や鶯眞砂町にとぶ

谷の雪鶯わたるあちこちと

鶯や繁華な島の舟がゝり

鶯や汐も濁りてヤマセ吹く

鶯や溫泉の地と知る恐れ山

鶯や峽の戸なりし飛岩に

山吹の木曾鶯に鯉舁いて
鶯や小祭を富士講の人

歸雁

國境の兵を撤すや歸る雁
汐落ちて遙かに雁の名殘かな
大風の凪ぎし夜鳴くは歸雁かな
去ぬる雁いつとしもなく五位の聲
雁去つて歸順の民となりにけり
ほろ降りに小戻りするや歸雁鳴く
恐山の空を北する雁哀れ

根室

流されたよな逗留や歸る雁
焚火すれば舟待つらしも歸る雁
里の月辛夷大樹や歸雁鳴く
屯田の武備解く頃や歸る雁
コガイ掘る灯に鳴く雁も名殘かな
雁名殘鳴けば朱を染む貝のあり
古き市の名殘住む濠や歸る雁
墓は故國に都建碑や歸る雁
雁去つて簀ほとりの家鴨雁鳴きす

雲雀

籠の中に粟くひこぼし鳴く雲雀

大澤の廣澤の水や鳴く雲雀

牧場にせよと野に鳴く雲雀かな

雲雀の句野に住む人の所望かな

埒越えて飛ぶ馬もあり鳴く雲雀

灣を畫いて我家圖し見つ鳴く雲雀

また雨な下總東風や鳴く雲雀

鳴く雲雀あらぬ江に土積む船が

山室山卽事

伊勢大觀宣長山や鳴く雲雀

御手植の鍬と扈從や鳴く雲雀

第一日は試足雲雀に驟雨來て

雉子

里指せば押し隔つ山を鳴く雲雀

山道の畑ある方や雉の聲

山笹の上をすれとぶ雉子かな

雉なくや芽生になりし猿棘

雉子塚殘りて野人哀れめり

雉罠にかゝりしを狐食みにけん

難所なる蝶螺上りや雉の聲

奇瑞なる白雉の年の大赦かな

雉鳴くや谷の尾感む丘だゝみ

雪も處々樺の枝鳴りを立つ雉か

軍用に石取りぬ荒墟鳴く雉子

雨ふら〳〵大津出て來る燕かな

燕や矢橋の舟は今出でし

燕の古巣を見るや智恩院

鹽濱に下りては歸る燕かな

宇治

千鳥鳴いて燕すり行く水面かな

札幌

九條まで町の木立や飛ぶ燕

巣燕の悲しみ合ふを人知らず

蜆かけば八ッ晴を飛ぶ燕かな

噴火口に奇しと見る岩燕かな

此邊の兒童婦女眉目清秀なるが多し

美人系の朱線引かばや燕

岩燕鳴く靄晴れの虹見えて

燕下りて風を語ると鹽田人

落葉松の森岩燕飛ぶる空

瀨全き水となり伊吹落つ燕

川口賑ひ見たさ燕が堀筋を

藪越しをする燕門田別れして

囀や一時に開く桃李

囀や子安地藏の高い木に

囀や春菊一花珠光る

裏富士の囀る上に晴れにけり

囀や椰の熊野に桃李園

呼子鳥　呼子鳥また聞えずよアイノ臺

獺祭魚　獺魚を祭る三湖の岩いづれ

鳥交る　鎌倉や雀の交る麥畑

李散る地上の雪や鳥交る

雀交る花園村の停車場

藤棚のひづみに雀さかりけり

鳥の巣　庭杉栞刈る遲し巢立ち巢替へ鳥

孕雀　濱庇孕雀の吹かれけり

雀子　嘴の黄のあたら鳴きやうや雀の子

飛びまけて大聲に鳴く雀の子

雀子や韓兵守る城の門

明神の森の漁村や雀の子

蛙

勝ち勢を夜籌に鳴く蛙かな

手習によき晝出來しぬ鳴く蛙

山の灯も見えて蛙や四方の里

柳鮠

堰の上水靜かなり柳鮠

獵過ぎし鴨場の水や柳鮠

殊に一樹覆ふ森の池や柳鮠

境内の古き泉や柳鮠

落合や左右に釣して柳鮠

家鴨游ぶ湖落口や柳鮠

白魚

ちり〳〵と網の雫に白魚かな

水舟に交り來る日や白魚舟

砂利とるは冬つぎ業に白魚簗

若鮎

朝曇隈なく晴れぬ小鮎釣

諸子魚

雨中石山を下れば諸子魚飛見ゆる

蝶

日陰蝶がうら淋しさうに飛んで居る

陣營を進めし跡に胡蝶かな

高潮の夏めく風に蝶々かな

花高かりし藪の道蜆蝶群れて

蝶そゝくさと飛ぶ田あり森は祭にや

海札所畑只殼の飛ぶ蝶か

谷岐れに入る渡し蝶々芝廣ろに

荷馬車溜り藪傾くに蝶の空

蜂に螫れし幼な覺えの物怖れ

蜂のとび去らざるに蝶の行過ぎつ

隣から藥草呉れぬ蜂の毒

あらすごの熊蜂に迫はれ逃にけり

蜂の巣や切込む程に樫の枝

三本木蜂の巣見ゆる軒端かな

楢山の阪行く道や蜂の聲

すべり場を飛去る蜂や餘所心

蠶桑に養蜂一縷保つかな

翼鑠たる父も在して蠶時

蓆分けて蠶淋しくなりにけり

夕暮のほの暗くなり蠶棚

桑摘の山も越え行く蠶飼かな

追々に桑乏しくて蠶飼かな

蠶室の多摩川見えて霞かな
灯ともして奥尙暗き蠶棚哉
枝桑のあらけなきさへかひこかな
京人の見るうれしさや蠶飼振
上簇も己にひまなき桑子かな
桑賣るや殘る蠶も呉れてやり
蠶飼女の蠟燭ともす夜食かな
掃き下ろし蠶飼ひまなき日記かな
あら遲の坊の蠶や上りやう
渡り蠶の白玉分つ筵かな
黄金なす病む蠶哀れを掌

釘責めて蠶棚作りやまだきより
蠶捨てし裏川螢見る夜かな

虻

虻と蜂の花に日暮るゝ別れかな
境内の廣きを掃くや虻の聲

田螺

樋の口や田螺とぼしき水溜り
田螺鳴く二條御門の裏手かな
把栗寺の主を知れる田螺かな
畚見れば田螺ある宿雛立てゝ
田螺搗て田戻りと牛に立寄れる

湖田螺横川への杉の苗浸けて

蜆

口あいて居れば釣らるゝ蜆かな

砂川の松こまやかや蜆取

水買うて分つ蜆や隣同士

藺藏も建つ坪取りや蜆殼

寄居虫

やどかりの口惜き足を見せにけり

梅

植物

畑中に梅折る人の見られけり

長池や梅に茶翁のたゞ老いぬ

白河や石切る家の梅の花

古き梅古き柳や小六條

夕暮を早くとざしぬ寺の梅

椶櫚の葉に枇杷の葉に梅の落花かな

梅林に入る麥の間の小徑かな

紅緑の笠に題す

かくれけり紅緑名をぞ梅柳

梅折つてかつ散る花や眉の上

皇太子妃冊立

白梅に紅梅たぐへおはします

梅咲いて根岸にあれば閑居かな

境内の刈芝を踏む梅見かな

梅咲くや甍めでたき土肥の寺

六花召集せらる

僧籍の軍籍の人や梅の花

大戰の一とせ過ぎぬ梅の花

句佛上人に隨伴して

男山に祈ることと梅に霽晴れて

四隣より掘り捨つる藪や梅見えて

藪の梅なりしにや畑の二三本

月ヶ瀬にて

蟹の食みし山葵と見する梅の宿

弔鳴雪翁

梅ばかり十枝あまりをまゐらせん

紅梅

いと赤き梅や雞鳴いて日午なり

町中に紅梅咲くや醫者の家

桃

桃咲くや湖水のへりの十箇村

咲きわけの桃にいやしむ小庭かな

旅にして晝餉の酒や桃の花

野の家の桃に垣して隣同士

室町や緋桃咲いたる古き家

従軍行

杏桃の盛りや胡地を占領す

某妓の三絃に題す

散り布きし桃の上に雨の音あらん

汲む水の蟲觸れそめぬ桃の圭

赤い椿白い椿と落ちにけり

椿落ちて鵞啄む流れかな

椿落ちて赤き蕗の薹の萠ゆる縁

椿落ちて蘆の角ぐむ綾瀬かな

山椿高々とある峠かな

石高き磧に落つる椿かな

椿多き谷の深さや山巡り

江の椿赤きに舟のかゝりけり

貸家に厩あるなり落椿

椿谷蛇の池ありて山路かな

忠魂堂塔中にある椿かな

この流れ菖蒲秀でつ落椿

落椿地を染むと御記に見ゆるなり

椿森も見つつ瀧道に迷ふ人

自然火のおどろ見る家や椿森

石段も絶て上りや落椿

下山には順の背越えや椿森

彼岸櫻

比丘比丘尼櫻この頃彼岸なる

初櫻

市中の小さき寺や初櫻

初櫻松のあはひに可愛げや

櫻花落花

五ッ子を酒の片荷や山さくら

ふたかゝえ三抱えの櫻ばかりなり

寺の櫻のとなりに寺の櫻かな

輪塔やひやり〳〵と散る櫻

寂光院

法皇の御幸になりし櫻かな

須磨寺は畑の中にも櫻かな

三味線や櫻月夜の小料理屋

花に酒居つゞけの愚や二日酔

大佛の片手濡れけり朝さくら

古白追悼

花散りて淋しきものを君に問はん

海棲の櫻散る日や汐曇

ふらこゝに二人乘りたる落花かな

せめてもの境内見るや花の雨

唐櫃の何に過ぎ行く櫻狩

賀女子出產

產衣のいづれ桃かな櫻かな

吉野記行二十句

講人の花物語聞かばやな

立札も門も櫻も蝕みぬ

目の下に花離れずよ山巡り

修覆時落花の中の瓦かな

朝日さす杉間の花を數へけり

初瀨法師花の木間より見えにけり

燕の泥も落散る落花かな

十三塔花七めぐり廻らせる

花屑もかゝる隈なき大河かな

檜磨ぐ流れも花の麓かな

檜磨ぐ里人花に背きけり

飯貝の里にぞ花の流れける

櫻櫚高く見ゆ千本の花の雲

鷹鳴いて落花の風となりにけり

庭踏むや落花をさそふ通り雨

院の花軒の玉水流れけり

奥の千本雨中の花となりにけり

幕濡れて夕しづまる落花かな

花籠に花すくひ入れて歸るなり

尼も居て鮓を開くや山櫻

嵯峨半日七句

足もとの花眉の邊のつゝじかな

田樂

花に近く豆腐を搾る雫かな

曾游の月眼前の櫻かな

花を見てお身拭見ぬ恨かな

把栗寺や花散りかゝる藪表

花一木ありて貧しや把栗寺

落柿舍や花の流れの一とまたげ

西陣

機織女游ぶ日花に遲れたり

賀の能を催うす花の簪かな

修羅能の落花の風に扇かな

祝「日本」六千號

花を尋ぬ詩意に社中の祝かな

某子の羽織に書す

幕かへすやうに落花をふるひけり

鶯子を訪ふ

花なしとも君病めりとも知らで來し

鵜の群るゝ岩と汐木の櫻かな

悼翠濤

翁は安らかに眠れど我に花の散る

雨に出でゝ訪ふとなき寺や落花敷く

御柱も落花の風に震ふかと

宇久島

石垣住居する家の花に楪が

道成寺

緣ありく鳩にも落花思ひ見る

熊野川卽事

過ぐる舟と言ひかはす炭山の花

伊勢音頭を見る

花吹雪といはんより木瓜の散る如し

悼則々庵

落花大方根倒れす風も募りしに

吉野

遲櫻はなやかに遲き櫻や女神

遲櫻小室へ行かず鹿ヶ谷

山路來て楮花咲く遲櫻

下京に能師住むなり遅櫻

海棠

植木屋の海棠咲くや櫻櫚の中

愚庵海棠を拒んで植ゑざりけり

海棠の長者藤の大臣の名ありけり

某氏書齋

海棠に般若と見えて能の面

梨花

多摩川の水靜かなり梨の花

梨散つて川蜷見ゆる杭かな

木犀の古き庭なり梨の花

鳴瀧や杉菜はたけて梨の花

躑躅

躑躅山茶店出したる村の者

躑躅白き小庭も見えて加茂の家

むら躑躅卯の刻雨にうつろひぬ

黒谷の裏門はいるつつじかな

堤行く杉菜の中や白躑躅

つゝじ園樂堂開きある日かな

習志野に捕虜が折抽すつゝじかな

修覆料給はる寺や庭躑躅

再興の施主たのみあるつゝじかな

關守の活けたる赤城つゝじかな

山にある垢離場の水やむら躑躅

友猿のいがみ鳴くなり山躑躅

猿絲に枯れけん樹々やむらつゝじ

岩も割く樹もある宮居躑躅かな

昇仙橋

瀧に景は盡きたれど躑躅奥ありて

谷三郷山畑つゝじ蠶に燃えて

つゝじ折の花浸す水は一の宮

連翹

卷葉に連翹かゝる住居かな

辛夷

律院の松亭々と辛夷かな

韮崩ゆる畑見つゝ來れば辛夷哉

松の花

鉢植の百本松の綠かな

いくそ度こけたる松の綠かな

松綠しるき頃出水漁ありて

芽芒に兎見つ尺を松綠

山に醉うとさもなきを松烟る花

南方氏宅卽事

木蓮

木蓮が蘇鐵の側に咲くところ

柳

使して柳も見えず蜀の道
緑日の昼も店出す柳かな
繁昌を吸はれし町の柳かな
丁の字に大通りある柳かな
賑やかな町に寺ある柳かな
柳ある門邊來て廣場芝の見ゆ
五島戻れば港奥ある夕柳

木の芽

畑に雞多く棗の木の芽かな
玉垣の内に檉柳の木の芽かな

板圍て早や家の建つ木の芽かな
木の芽吹けばネモロ奥靄晴れずもに
角を磨する牧場の一木からき芽を
渡り木の芽の白し水塚の邊に

藤

低き木に藤咲いて居る山路かな
坂本の縁者許來て藤の花
白藤に雲行く杉の梢かな

山吹

傘さして山吹を折る小庭かな
山吹は春の名殘の一重かな

山吹やそぞろ見て行く舊草廬

山吹に立木も薄し箱根越

造林の奥山吹に奇景あり

琅々木會記念に綸笠を持てるに題す

山吹の色を大まかに染めなまし

菜の花

菜の花に汐さし上る小川かな

村芝居菜の花曇賑はしき

菜の花や清瀧に鱒上る頃

菜の花や馬車をこぞりて下りる人

菜の花に大阪城の見ゆるかな

海明りして菜の花に行く夜かな

大根の花

大根の花や子なきを老夫婦

薊

花薊草もとらずに古築土

雑木ある堤廣さや花薊

麥やせをおろそかに畑薊かな

木薊の枝照れり小松野に出づる

濱薊といふを見し又た濱木綿を

菫

花菫扇の芝は廣からず

菫より小さき草あらば問はん
田の畦の菫咲きけり初瀬道

木瓜の花

木瓜も咲く目黒に住むや己が畑
木瓜赤き日數の中に山吹も

李花

畑中に三輪の染屋が李かな

馬酔木花

隱れ家の淋しさ添ふや花馬酔木
尾あらはに馬酔木にとまる雉子かな
樒かとまがふ山路の馬酔木かな

腹落ちし鹿淋しさやあせぼ咲く
馬酔木咲く奈良に戻るや花巡り
庵の木瓜は腰高な木や花馬酔木

下萠

何の矢の羽含む土や草萠る
四蹄白の二歳たのもし草萠る

蘆の芽

門いづこ家ある池や蘆の角
蘆の芽や汐通ふ湖の一つ岩
泥を汲む里人もあるや蘆の角
橋杭も蝕みて蝦鉾蘆錐哉

梅園に住んで池あり蘆の角
埋立の築地崩れや蘆の角

名草芽　うら若き萩の芽のびぬ一二寸
忘れ居し荵を見れば芽生かな
雞頭の芽や此庵に大事がる

芒芽　草の中や一かたまりの芒の芽
薄の芽一鍬掘つて戻りけり

沈丁花　卓上の餉に匂ふや沈丁花

櫻草　牡丹園の牡丹に早し櫻草

薺　庵を出でゝ道の細さよ花薺
古道や芹ともわかず花薺

芹　芹たけて萍の中に花咲きぬ
芹生ふる田に河芹の伸びにけり

蕨　鶯鳴て蕨つむ日の暮れにけり
腰越の竹扉や蕨折り戻る

海紅堂花さかる頃や蕨汁

蕨食うて兎毛變りしたりけり

獨活　獨活つくる畑や茶をつむ山隣

茅花　茅花野や水澄む池に掬ひ飲む

萱のやうな大きな茅花抜く日かな

水入茶　莖漬のまだ盡きなくに水茶かな

青麥　青麥やゆすらも咲て蜑が垣

青麥の中に木もなき畷かな

蓬　灯の下にまた爪染めの蓬かな

虎杖　虎杖も木になる山や夏近き

虎杖やガンビ林の一部落

燒石に虎杖角を出しにけり

木置場の坪も虎杖林かな

八重櫻に示す

豆の花　そら豆の花見れば君を思ふかな

杉菜

茶畑の培はである杉菜かな

掻き上げし土に生ひ添ふ杉菜かな

御微行の沓を沒する杉菜かな

青々と根笹も交る杉菜かな

柴を置く庭も杉菜の伸びにけり

菠薐菜　菠薐菜畑一坪も鄙住居

山葵　すりこぼつわさびの水の緑なり

若和布　海苔賣の荷の上敷に若和布かな

貝殻を洗うてすてる若和布かな

海苔

海苔の香や誰が袖が浦と故人の句

海苔汲みは汐汲女にや鹽烟

掛け初めし昆布も春なり海苔を干す

島海苔を太布のやうに疊みけり

燈臺の人も岩海苔掻く日かな

岩海苔にかくるゝ貝の蘇枋かな

一冬を隔てし島の海苔の香や

雜

蕪村村に處し曉臺臺に上る春

手折り捨てし花踏み行くや春の園

従軍行

草木も靡く大軍過ぐる春

墨汁一滴を讀みて十句（春、夏）

けふの（明三四、五、四、）玉歌何たる心細さぞや

仙藥を君きこしめせ暮の春

一八や千翁の花萬年青の葉

何事ぞ君を泣かしむ牡丹哉

世は七重八重山吹の咲く事も

藤ゑがく根岸の畫伯こゝにあり

山鳥の尾の長夕顔の芽生かな

咲き出でゝ絶せぬ薔薇花戀し

萩の芽にこの秋の萩の句を思へ

鶴の子を思ふ小松の緑かな

物種を蒔いて足立つ夢あらん

謠曲竹生島雜詠抄五句

神の春女人禁制もなかりけり

藤風や漁翁と見えて難有

花降りて天心龍神の舞ふとかや

御姿湖上に浮ぶ霞かな

春の日の鱗光る尊さよ

歸省雜詠抄十一句

此夜法主の花筐をきく

發句のやうならゝかな御謠かな

漢々庵に泊して

けふの花の車上の吟を語りけり

廣島車中所見

藪のある山に菜種の花見ゆる

宇品船中

水母多き海に島山つゝじ哉

高濱港

山を切つて海を埋めし霞かな

母に見ゆ

三年の腰の曲りや暮の春

甥姪十餘人皆健也

並ひ居て蛙のやうな顔があり

亡父法要

豆の花もそこらの木々も忌日かな

墓參

春蟬のひや〳〵と鳴くや山の松

霽月極堂と高濱に會す　二句

山下りて砂かく春の海邊かな

隣せる入江港や春の海

（明治三十九年）

夏之部

時候

五月

門川に流れ藻絶えぬ五月かな

大名の大井つぎ越す五月かな

十洲に地の神震ふ五月かな

溢れある五月の水や犬走り

兀然と雲に富士ある五月かな

六月

水無月や京洛中の鬼の沙汰

起臥の神鳴月や峰の坊

みな月の田あぜに黍の高さかな

京十日神鳴月の比叡曇

六月の桐の蟲葉の穴日かな

短夜

短夜や町を砲車の過ぐる音

短夜の大佛を鑄るたくみかな

短夜の山みどりなる寐覺かな

短夜の橋に火を焚く出水かな

明易や盤梯の麓湖の側

短夜の己と知らで夙に起き

短夜や瑞賢水を見廻りぬ

短夜や漕ぎ放れたる淡路島

日盛

砲車過ぐる巷の塵や日の盛

聯隊に祭る遺骨や日の盛

日盛の大地の蟻や智恩院

日盛に漢の大道通りけり

我閨のあつけらかんと日の盛

日盛や雨を思はぬ稗畑

前鬼より後鬼に日ざかる姿かな

水を見て馬も足掻や日の盛

日盛に乳垂れ銀杏の枯れにけり

草の戸や蜥蜴相食む日の盛

掘る井戸の機嫌問ひ來ぬ日の盛

星明りに出し草刈りし日の盛

古一念子の理想選擧祝當選

君を選ぶ我が一票に日盛れる

夏夕氣草臥に臼働きや夏夕

麵棒の音蘇る夏夕

暑

暑き日や舟のあゆみの燒けてあり

幕なりし布解く家の暑さかな

親不知

涼し涼しさの浪寄るや我に母います

涼しさうな鐘の茶店や智恩院

我山は涼しき空に聳えたり

涼しさや淺間の雲に包まれて

伊豆の海も見ゆれ涼しき鳥居前

公達の涼しき衣や袴能

黄檗山知客寮

道場の僧の素氣なき涼しさよ

留別

海樓の涼しさ終ひの別れかな

涼しさや牛が離れて岩の鼻

露月に會す

子規のことを語る悲しさ涼しさよ

艶體

膝と膝に月がさしたる涼しさよ

沖鳴きをする怪鳥と暮涼し

晩涼を趁ふ徒に交る下山かな

湖巡りして記を思ふ亦た涼し

海を隔てゝ峰聳ゆるぞ園涼し

七十二峰半ば涼雲棚引ける

浪化上人の眞蹟を拜して

御筆の御年の程も涼しけれ

悼露皎

遅かりしも悟る涼しさに滿足か

炎天

炎天の鴉は鳶よりも苦し

炎天や木立過ぎ來し川原越

旱

萍の澁色旱る日頃かな

ガッキ食む音を古老や旱虫

旱知らぬ一里搆へに長者かな

旱草稻にまがへる穗立かな

山旱干割れかしこき硫黄谷

牛の角木肌火を磨る旱かな

虹のごと山夜明りす旱年

梅雨

麥梅雨の小家に茂る棗かな

沼ほとり梅雨の水かさの葉蕗かな

梅雨に入る黒きにごりや俵鹽

梅雨濕りよろ〳〵蟲の灯に出づる

藤棚も蘆そよげばや梅雨明り

土用

竹の實を集めて多き土用かな

兀然とニョロリ花咲く土用かな

土用芽の茶の木に蜘蛛の太鼓かな

着渡御も網子の群や土用浪

秋近

かりそめの病大事や秋を待つ

鐵鉢に絶て物なし秋隣

秋近し葉毎こぼるゝ百合の珠

蝕みし葉菊つみとる秋隣

賣値待つ繭の主や秋近き

天文

卯の花下し

葉廣秋海棠も卯の花くだしかな

新愁に堪へず卯の花くだしけり

白き見ゆ宮居卯の花くだします

松明照らす案内卯の花下しつゝ

悼森々幼女

幼きが一人卯の花下しかな

古白百ヶ日

五月雨

五月雨の日こそ多きに水雞かな

寺による村の會議や五月雨

五月雨に學校やすむ小村かな

水くゞる鳰見えすなりぬ五月雨

五月雨や鴉草ふむ水の中

病中を五月雨といふ雨が降る

悼碧玲瓏

五月雨の簑笠や君の行く處

又ただの一人になりぬきみだれん

牛の病知れず死にけり五月雨

温泉烟の田にも見ゆるや五月雨

悼三川

さみだるゝ旅硯の側や新俳句
金掘りしあとも湖邊にさみだるゝ

夏雨

大寺やなゐふつて夏の雨強し

夕立

水樓に夕立來べく待設け
夕立や夕顔棚の雫落つ

「車百合」廢刊

葬の句成つて夕立晴れにけり
法の山夕立にあへる小笠かな
遠漕の汐の流れる夕立かな

公園の四時の花壇に夕立かな
翡翠の杭に動かぬ夕立かな
水練の御覽夕立つゆゝしさよ
夕立や堀を劃せし城普請
夕立雲立つ山や花漬の宿
森林帶沮洳に咲く花夕立ちて

薫風

薫風舞殿や薫風畫の樂起る
鳥居前我れ旅人に風薫る
薫風や外宮の鳥居早や見ゆる
あさらけに齋釜に風薫りけり

薫風に我れ釣好む旅情かな

薫風や背丈の桑に妹諷ふ

牧牛の洲渡りするや風薫る

越中の饒村搜佛尋ね來る

金澤の薫風この方の對面ぞ

黄檗獅子吼殿

薫風や御經の版蝕まず

帆綱浸る舟の艙ゆれや風薫る

待つ船を物見に出るや風薫る

北涯庵

大樹の下兒女雞犬に風薫る

水月照る疾き魚も見ゆれ風薫る

會はんとぞ思ふに舟や風薫る

森の樓薫風に立つ鷺も見て

搜佛居

富守れば父祖の藏書も風薫る

山寺へ上す籠雞や風薫る

立山頂上

雪を渡りて又薫風の草花踏む

博覽會

青嵐

青嵐馬見れば馬買はまくす

舍營地の高き蓬や青嵐

甲山の行脚出途を送る

袴はいて千里の行や青嵐
中垂るゝ天井を吹く青嵐

黄雀風

鶯去つて黄雀風の吹く日かな

雷

停車場に雷を怖るゝ夜の人
雷の俄かなる笠に落んとす
顔白む端居夕べの雷雨かな
神鳴や囃子もすゝむ山車の上

對露月

神鳴るや子規亡きあとを談ずれば

雲の峰

雲の峰眞赤になりて入日かな
中空にはやて吹くらん雲の峰
黒船の動き出しけり雲の峰
雲の峰葱の坊主の兀と立つ
屋根の上に京も見え渡る雲の峰
船出する彼方の空や雲の峰
街道に鳥居曳く歌や雲の峰
雲の峰楠の落葉のがら〳〵に

蕗の葉の疊むしほれや雲の峰

雲の峰低き瞰るなり夕心

官命に伐る檜山あり雲の峰

錦川庵卽事

持山の果なし藪や雲の峰

空をはさむ蟹死にをるや雲の峰

戰さある北に立つなり雲の峰

阿蘇は阿蘇

外輪山に立つ峰雲や阿蘇あらぬ

乘馬隊漁區見分や雲の峰

龍飛戻りの平沙や雲の峰壓す

馴るれども天水湯浴雲の峰

蘆間なる飢鳥鳴くや雲の峰

首里城や酒家の巷の雲の峰

夏雲

夏雲の機手の燒くる如きかな

夏の月

川筋の高き臺や夏の月

今頃を代馬戻る夏の月

宿の裏堤にあそぶ夏の月

水に劃す都や水の夏の月

伊豫四阪島

烟白う柱立つ海や夏の月

清水

地理

男體の鳥居に出でゝ清水かな

先鋒のいつこゝ過ぎし清水かな

雲高く一片かげる清水かな

劔岩殘りて清水無かりけり

清水ある坊の一つや中尊寺

庵結ぶ開眼佛や庭清水

妙見の走り清水や染屋町

峠なる朴の木清水朴望む

校長と母校の清水忘れざる

壕作りて清水あるなり蘆の中

温泉絶えしあとに名のある清水かな

清水ある燈臺に無二の君を得し

清水得し島とこそ奇草三度摘む

觸る木踏む草ヨナ立たずま下清水越

夏川

夏川や人愚にして龜を得たり

奇勝つきて落合になりぬ夏の川

蘆交り藻の横沼や夏の川

夏野

夏野來て虹見るべく小雨日の照らす

旅人の笠大いなる夏野かな

草の上通ひ路存す夏野かな

茅花の穂吹靡きたる夏野かな

馬に乘る人を彼方に夏野かな

ひら〳〵と晝花火落つ夏野かな

腐りたる貢夏野を如何せん

車馬行くも城の見下ろす夏野かな

お旅所や夏野に据ゑし荒御魂

賈人我を賈となす夏野連れ立ちて

近渉りして遠路の夏野かな

砲も過ぎしと敎ふ夏野の車道かな

島渡り明日はと望む山夏野
笹の中を植林の道を山夏野

夏山倒れ木も多し百合咲く夏の山

夏山や鶯鳴て大原野

木の國の奥の部落や夏の山

一行の國境越えや夏の山

鷺立てる沼田の上や夏の山

湖は一握の水夏三山の天

夏の海海樓や日覆の下の夏の海

青田大沼に小沼も近き青田かな

酒旗見えて花咲く蓮田青田かな

人事

更衣　人の國に來てぞ似つかぬ更衣

別莊の花園の花や更衣

國振の鮓もうれしき更衣

分限者の己が畫像や更衣

更衣川原蓬の露を踏む

言はざるを以て箴とす更衣

更衣水隔つ城低うして

袷　靑物を買ふ女房の袷かな

袷着て歸れば句を乞ふ人あらん

盆石を掃く疊袷褄ずりに

夏衣　庵に在りて風飄々の夏衣

烏鷺に似し客二人あり夏衣

道中のうろう買ふや夏衣

單衣　乳あらはに女房の單衣襟淺き

夏羽織　夏羽織一刀腰に醫師かな

商人や丈の短かき夏羽織

夏羽織袂ひやつく月夜かな

帷子

帷子や八阪の百度朝に踏む

帷子や損者三友交らず

羅

羅のさめて紫陽花のハナダ色

羅に包むともしや假枕

業平東下りの圖

鬢に羅かゝる首途かな

照君

羅の皺も涙にくたれけり

曾我蕭白賛

羅に淡墨刷きし箒かな

羅と掛香とみやび極まれり

羅のすべる銀屏さやかなる

松前渡り

海鳥の呼ぶ北門の渡りかな

蝦夷人の望む渡りの帆十分

津輕絹積むも松前渡りかな

矢數

草むしして弓の天下の廢れたり

から〳〵と矢束解きたる矢數かな

年久しく總一の尾州天下かな

總一の競ひ最中の籌かな

たのみある矢數の主の假寐かな

ものゝふの矢數戻りや男山

競渡　烏帽子著てさしづ顔なる競渡かな

競馬　おくれしがよく乘立てし競馬かな

佛生會　田樂に甘茶をそゝぐ八日かな

新茶　釣殿の祭ある日の新茶かな

幟　我高く立てんとすなる幟かな

城跡をしのぶ上野の幟かな

亞父の來て幟の祝ひしたりけり

一雙の幟や裾野越えくれば

家々の牡丹酒村の幟かな

菖蒲太刀　菖蒲太刀前髪の露滴たらん

粽　粽師の古き都に住ひけり

藁筵粽をさゝやかに結ぶは女粽かな

草の戸や眞菰摘み葉の結ひ粽

結ひすます程に耳垂れ粽かな

打佗ぶる木の葉も婆が粽かな

福井

菖蒲葺

家並の屋根に石置く菖蒲かな

温泉の屋根に菖蒲葺くなり有馬山

蘭湯

蘭湯に浴し錦を著たりけり

藥日

蓬干す筵ものべぬ藥の日

藥草摘

藥草を摘み居れば園の孔雀鳴く

藥玉

藥玉やものつたへ來る女の童

竹醉日

竹植ゑて黄なる柑子の玉を抱く

祭

樂人の休み顔なる祭かな

篝焚く二タ峰も漁村祭かな

高瀬川筋穂高祭の篠子刈る

草合　水草は水にさしけり草合

御祓　御祓して浅き流れや石光る

川社童の裸體水に居り

馬洗ふをのこ去りけり御祓川

雷の陣稲妻の矢や御祓川

夏行　清淨と夏書の一間塵もなし

夏斷して佛の痩を忍びけり

雲晴れて解夏の鶯聞えけり

百里來て結夏に參ず山居かな

骨立の百日の句夏を結びけり

青簾　青簾垂れてぞ語る朝日かな

下向道水打つもあり青簾

塔雛型あるこの宿や青簾

子三人我が境涯や青簾

几置き疊む一夏簾かな

扇　子の祝ひ力士が呉れる扇かな

鉾のあと落ちてふみ行く紅扇

岩倉に誰そ白扇を使ひけり

加茂の水銀扇の上すべりけり

二なきもの遺筆となれば扇かな

妓王寺に比翼扇の一つかな

師の扇親しくも持たず座右かな

團扇

筆筒に團扇さしたる机かな

江戸役者を團扇と誹り京扇

反古堆裏埋む疎懶の團扇かな

刷箔の畫壁に掛る團扇かな

白紙より白き團扇を座右かな

掛香

掛香や派手な浴衣の京模様

歌垣に掛香に君が數へけめ

帖に栞せしをや忘る薫衣香

掛香や舊府の染布色淡き

夏痩

夏痩の文長〳〵と物しけり

夏帽

夏帽を葱にかけし宿りかな

編笠

編笠や追手大津の乘合に

簞　簞笥の日ざし傾きぬ

竹婦人

抱籠や國事にしのぶ京の宿
大名の俳諧知れり竹婦人
抱籠に團扇さゝれて翼かな
竹奴抱く心に脚婆思ふかな
瓢なくてあるは竹奴をかけにけり

日傘

船宿に忘れじと妻が日傘かな
嫁日傘馬で打ち行く縄手かな

疊みあれどくれなゐ哀れ日傘哉
誰が日傘忘れある蜂屋音のして

風鈴

風鈴や刀いぢりの小半日
風鈴のあとの午睡を魚躍る
風鈴や島の祭の水船に
鈷鈴とか南部風鈴音を鳴りぬ

鮓

鮎鮓の鮎さながらに活々と
鮓米や白きが上の夜の露
高峯より下りて日高し鮓の宿

夕鯵の鮓さそくなるうれしさよ
竹皮の鮓食ふ初瀬の法師かな
名物の鮓曲物に葉蓼かな
打はえて朱椀鮓盛る長が宿
鮓を切る我妹子見れば莞爾たり
千々の條朱を引く鮓の石のあり
溫泉の鮓をまねぶに廣葉笹ありて

心太

心太に月上りたる戸口かな
心太この海草の香に匂ふ
東ねさす躑躅うつろふ心太

氷見の海一道の雨や心太
寺を出て啜る淋しき心太
主してよき壺見せつ心太
よき井戸の灘の主や心太
繭ざれを兎角もあげず心太
一行皆草苞置きぬ心太

田植

田植時水守る男疲れけり

謠曲加茂

靜かなる御田の歌の囃子かな
こけ尻の馬も早苗を運ぶやら

變がへをする早乙女が憎いやら

米白ロの長者になろよ田植歌

下山して蚊帳吊る夜も田植寒ム

田草取

蠶上りの祭もすみぬ田草取

蘭

白々と積む蘭見ゆる宿りかな

水飯

水飯の水こぼしけり膳の上

水飯一椀冷酒半盞に僧を請ず

宿の前廣き流れに洗ひ飯

乾飯

乾飯や卯の花散つて白きもの

儒者の家に袋のものや道明寺

貯へて風入るゝ日や道明寺

乾飯の物くさな宿や帚草

乾飯の笊かく音も夕かな

富士詣

山開き十三洲の日和かな

富士百句作りし行を想ひけり

富士行者雲にまがへる白衣かな

雨乞

雨乞ひの下賤の顔も祈りけり

雨乞やけふを空しく明日の空

川上る舟人も雨の祈りかな

雨鬼風鬼祈りの鐘に問答かな

火串

火串消えて火を借る路の小家かな

火串置いて化鳥鳴くなり夜を深み

飛彈人の山に狩入る火串かな

瀧殿

洛北の第や瀧殿泉殿

瀧殿や窟の神も鎮まりぬ

大原なる山べの瀧や殿作り

雲板を掛けし瀧殿楣間かな

蚊遣

わが庵は蚊遣すべく又せざるべく

蚊くすべのにほひや宵の人通り

馬方の喧嘩も果てゝ蚊遣かな

匂ひする園主が菊の蚊遣かな

對局に蚊遣置去る女哉

蚊遣草置添ふ座右の童子かな

棋に寄ると君を圍むと蚊遣して

堤隔つ家並の蚊遣草暮れて

蚊遣ともなき柴座右にポッと燃ゆ

納涼

涼む子等床几舁き行く川の中

此頃の納涼芝居や電氣燈

端納涼しをれど明日は別れかな

納涼すやありし鴨涯の手枕に

納涼にや出でし燈影たゞに澄む

明日渡る湖の眺めや端納涼

螢來しあとや蟬とぶ端納涼

岬の灯紛れずもすゞみ行方かな

觀音まで上れば雨や納涼船

起し繪

とり〳〵におこし繪三つをともしけり

蓬生の宿におこし繪あかき哉

甘酒

甘酒を買ひに來るなり女の子

甘酒のこぼれてあつし足の先

煮酒

酒を煮る酒のこぼれや竈の前

削氷

削氷や鉾に乘る兒にかしづきて

氷餅　旅人や木曾の木皿の氷餅

氷室ホヽ　鳥は氷室の杉の梢かな

蟲干　蟲干は風吹き通す座敷かな

なつかしく遺書の曝書に參り鳧

蟲干や返す人亡き書一函

蟲干の寺に掃苔の供養かな

蟲つゞる文のさうなく束ねけり

草庵

十哲像蟲干さるゝと笑ひけり

歸期も知らぬ主を待て曝書かな

秩の數唐書を曝らす史閣かな

百品の打碑珍寶や蟲拂

好きで藏す後半生の書を曝らす

雜書の部一二の畫譜も蟲干しぬ

紫泥書の院に古りたる曝書かな

長持の簿書風入れや御目錄

蠅叩草の戸やさゝらになりし蠅叩

打水　三尺の庭に水うつ桐一木

打水や往來の馬の驛だまり

水を打つ樓や游船並びけり

水打つや檜葉からみ咲く晝顔に

水を打つ町や外宮に詣りけり

晒井

晒井の水や溢れて祇園町

井戸晒すはだかの寒き身をふるふ

漬瓜

漬瓜やひまな世帶の壺一つ

梅干

梅干はすでに日蔭や一むしろ

干梅の紅見れば旱雲

梅干に落交る棗捨てにけり

沖膾

島巡りして戻るなり沖膾

よき潮に我も釣りしが沖膾

樓を下りて又た舟興や沖膾

葛水

葛水の主落梅の書窗かな

葛水や幢幡の風見通しに

晝寐

愕然として晝寢さめたる一人かな

五工庵

戸も押さで主がまねの晝寢哉

水を買ふ頃や日毎の晝寢覺む

宿は橋を見下ろす京や午寢起

晝寢覺め問端に土を買ふ事を

川狩

引上げし夜振の網や草の上

我行くと誰知らぬ淵の夜振かな

鵜飼

羽たゝきや繩に釣られし鵜のたけり

引き上げて荒鵜をづかむ人數かな

鵜つかひや忍冬咲いて晝の宿

闇中に山ぞ峙つ鵜川かな

御座船を人は拜みに鵜を御覽

川水を浴びせ消したり鵜の篝

鵜舟待つ川下舟の游び哉

鵜匠見れば鵜つかひ見れば遑なき

鮎流す水も出るや鵜飼時

鵜の亂れ早瀨の水に落ちつ落つ

早瀨越して鵜舟の速き遲きかな

鵜舟見ゆと樓上に身を起しけり

鵜づかひが二人住みけり小さき村